検証仮説 | HYPOTHESIS FOR VERIFICATION

地域分析ツール

ブロックの定義と TRL という指標

TRL ＝ Territory Resilience Level（地域レジリエンス水準）

別府（FW1）・熊本（FW2）を経て、富山（FW3）に行く前までの仮説の整理

Post Growth City Lab | 2026.10

日鉄興和不動産 FUTURE STYLE 総研F ZEBRAS AND COMPANY

POST GROWTH CITY LAB

地域のどこに手を入れるかの仮説を、毎回同じ手順で立てる道具

導入

結局これは何か ★ 要点

考え方を一言にまとめると、3つの問いに順番に答える手順である。答え終わると、その地域の診断が一文で出てくる。

Q1
どこまでを、1つの地域と見るか

↓

ブロック

答え：全国を55に括った範囲

→

Q2
どこで、価値が抜けているか

↓

TRL

答え：5変数のうち詰まっている変数

→

Q3
では、どこに手を入れるか

↓

地域の型

答え：打ち手の方向と関わり方

出てくるもの ＝ 一文の診断（例：富山に行く前の富山ブロック）

「富山 ＝ 稼いだ分はよく域内に残る（R＝5）が、自然資本力（C）が詰まっている。ただしCの測り方が粗いので、現地ではまずCと産業のつながり（D）を確かめる」

これは

○ 関わり方の仮説を、同じ手順で立てるための道具

これではない

× 地域を点数で格付けする道具
× 正解を出してくれる計算機

富山ブロック —— 範囲と中身と診断

例：1ブロックを1枚で見る　★ 要点

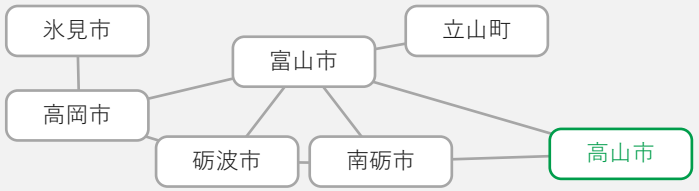
導入

富山に行く前の時点で、富山ブロックに置いていた範囲・数値・診断である。55ブロックのそれぞれについて、この形の1枚をつくることを目指している。

① 範囲

未確定 → 論点 3

Ⓐ つながりの網（中心を置かずに並べる）　模式図



Ⓑ 結びつきが集まった富山市がハブに → 区切る



構成：富山市・高岡市・砺波市・南砺市・立山町・氷見市（構成定義書のステータスは「確定」）。高山との重なりは、p.9 の見直しで浮上した確かめる問い。

② 中身（RESAS 2022）

主な産業

薬業 × 製造業 × 農業 × 小水力

地域経済循環率

98.9 %

稼いだ所得のほぼすべてが域内の支出に回っている。55ブロックで実測できた中で最も100%に近い。

一人当たり付加価値

1次産業	2次産業	3次産業
227万円	891万円	861万円

第3次産業は全国513位（V＝3の根拠）

③ 診断（TRL）

V	R	D	C	S
3	5	4	2	3

TRL ＝ **360**　◎循環強化型

55ブロック中4位タイ。詰まりはC（自然資本力）に出ている。

現地で確かめる問い

・Cは本当に詰まりか（今の数字は量ではなく活用を見ている）
・産業は実際につながっているか（D）
・高山はこのブロックに入るのか

未確定 → 論点 6・8

※ D＝4・S＝3 は55ブロック一覧の値。初期プロトコルでは D・S を「3〜4（要確認）」としており、置き方によって点数は動く（p.23）。

全国を9地域・55ブロックに括った（いずれも仮置き）

55ブロックの一覧　★ 要点

色は仮スコアによる診断タイプ（p.26）。数字はTRL。●はRESASで実測できた15ブロック、○は地域特性から推定した40ブロックである。

北海道 5	東北 8	関東 4	甲信越・北陸 5	東海 5	近畿 6	中国・四国 7	九州 8	離島・特定 7
道央（札幌圏） ● 180	仙台圏 ● 240	東京圏 ● 40	富山 ● 360　FW3	名古屋圏 ○ 120	大阪・神戸圏 ○ 144	広島圏 ○ 216	福岡圏 ○ 288	沖縄本島 ○ 72
道北（旭川・稚内） ● 120	庄内（酒田・鶴岡） ● 216	北関東 ○ 162	金沢・能登 ○ 90	浜松・静岡 ○ 216	京都 ○ 324	岡山 ○ 324	熊本（TSMC圏） ○ 162　FW2	沖縄離島 ○ 144
道東（十勝・帯広） ● 90	会津 ● 192	南関東外縁 ○ 108	新潟 ○ 108	伊勢志摩 ○ 216	和歌山・奈良 ○ 288	山陰（鳥取・島根） ○ 288	大分・別府 ● 360　FW1	奄美 ○ 360
道南（函館・室蘭） ● 270	南東北（郡山・福島） ● 144	神奈川×静岡東部 ○ 162	長野 ○ 324	岐阜 ○ 324	琵琶湖（滋賀） ○ 432	山口 ○ 243	宮崎 ○ 216	五島・壱岐・対馬 ○ 192
オホーツク ● 45	福島浜通 ● 192		山梨 ○ 288	知多・西三河 ○ 144	但馬・丹後 ○ 288	愛媛 ○ 432	鹿児島 ○ 216	岩手内陸 ○ 243
	三陸 ● 240				熊野 ○ 288	高知 ○ 192	長崎 ○ 216	島根・石見銀山 ○ 288
	秋田 ● 144					徳島・香川 ○ 432	佐賀 ○ 216	南九州離島 ○ 288
	青森 ○ 72						北九州工業 ○ 72	

◎循環強化型 10　○循環機能型 21　△転換萌芽型 17　▼ザル・流出型 6　▼流出型（強）1　これまでのフィールド

未確定 → 論点 9・10

富山に行く前に、地域を見る仮説としてブロックを切り、定量で見た

本資料の位置づけ

本資料は、FW3富山に行く前の時点までの仮説を記録したものである。富山以降に出てきた論点や用語は含めていない。

完了
FW1 別府
固有TOPの抽出

→

完了
FW2 熊本
戦略的アセット仮説
GPNとの接合

→

本資料が扱う範囲
分析ツールの仮説化
ブロック定義
TRL・地域の型

→

次（本資料には含めない）
FW3 富山・FW4
道具を当てて検証
仮説の更新

FW1・FW2で何が起きていたか

別府・熊本では地域ごとの固有の読み解きが蓄積された。一方で、どこまでを1つの地域と見るか（範囲）と、その地域がいまどういう状態にあるか（現在地）は、毎回その場で仮置きしていた。熊本では「行く前に、どの市町村が入るのかを議論していなかった」という反省が残った。

このため、3箇所目に行く前に「範囲を決める道具（ブロック）」と「現在地を測る道具（TRL）」を仮説として組み立てた。

既存の地図では、地域の現在地も関わり方も決められないから

なぜこの分析ツールを作るのか ★ 要点

行政区分・広域ブロック・一極集中論——いずれも今の判断には足りない。足りない箇所を埋めるのが本ツールの役割である。

1 行政区分と実態がズレている（経済圏だけの話ではない）

国の広域ブロックは行政慣習の積み上げで、実態の経済や生活のまとまりとは一致しない。熊本では、見るべき範囲を県全体でも熊本市でもなく「県北エリア」と置き、その根拠を細川藩の城下町と薩摩街道（いまの国道3号・九州自動車道・九州新幹線と重なる）という歴史的・地政学的な条件で説明した。ズレるのは経済圏だけでなく、生活圏や文化圏も同じである。

→ 実態に沿った範囲＝ブロック

2 「東京が吸い上げ、地方が衰える」だけでは打ち手が出ない

東京と地方を勝ち負けで比べると、どの地方も「衰退」の一語で括られてしまう。実際には、地方の多くは資源や人材を東京へ送り出す中継点として組み込まれており、どこで価値が抜けているかは地域ごとに違う。何がどこを通って流れているかという構造で捉えないと、手を入れる場所が決まらない。

→ 地域ごとの現在地＝TRL

3 地域を見るための共通の見方がない

FW1・FW2では、地域ごとにその場で読み解いてきた。PGCLとNKREがどこに・何をもって関わるかを決めるには、どの地域も同じ見方で捉え、弱点がどの変数にあり、どのアセットが健在かを名指しできる必要がある。

→ 地域を見る共通の型

ブロックとTRLは一度で決まっていない —— 半年の変遷

ここまでの議論 ①

ブロックの切り方とTRLの定義は、並行して変わってきた。上段にブロック、下段にTRLの変遷を置き、どこで何が揺れ、どう切り直したのかを残す。

2026.01 ～ 03	2026.04	2026.05 ～ 06	2026.07 ～（熊本レポート以降）
前提と呼び方が揺れた	**切り方を決めた**	**定義の穴が出た**	**定義を作り直した**
ブロック ・熊本FW総括で「ブロックは閉じた領域なのか」が揺らぐ。熊本はブロックというより「でっかいハブ」ではないか ・必要条件＝地域戦略を打つ意思、十分条件＝規模と自然資本、という整理が出る ・「ブロック拠点」から「ブロック」へ呼称を変更 ・3月、モデルA（ピラミッド型）とモデルB（ネットワーク型）を定義（→ p.8）	**ブロック** ・モデルBを採用 ・県を単位にすると、暮らしの見えない大きな圏域で括られてしまうため不採用。ノードとハブの接続の濃さで括り直して55ブロックへ ・インフラ8要素を移動1～1.5時間圏にプロットする判定方針 ・RESASを市町村単位で集計し、定量的な根拠を取る作業へ	**ブロック** ・飛騨問題。美濃と飛騨は同じ生活圏ではない。ヒアリングを経て富山寄りに置き直す（→ p.9） ・30万人の目安に対し飛騨は約15万人。人口規模を併記して検証する方針に ・「あらゆる観点で同じブロックになるとは限らない」という問題提起 ・広井先生から「東京まで入るのか」。8要素は所管省庁が分かれ、全体を把握できる人がいない	**ブロック** ・熊本レポートで、範囲の塗りつぶしやTSMCのピン1点が断定的に見えるという問題。ふわっとした円と複数ピンで示す方針へ ・熊本ブロック（県北）の根拠を、細川藩の城下町と薩摩街道で説明 ・飛騨高山への事前リサーチで定義を見直し、行き先を富山に変更 ・流域を要件に組み込む案が出る（時期は要確認）
TRL 式はまだない。3月のブリーフィングで「人口減少時代に見るべき4つの指標」（循環率・循環の質・人口の質的動態・自然資本）を置く	**TRL** 測定プロトコル（v1.0）で5変数（V・R・D・C・S）を定義。55ブロックに統計から仮スコアを置く（実測15・推定40）	**TRL** 55ブロックに当てはめる過程で、Vが金額帯、Cが農地生産性のみ、Sの5が「離島・過疎先進地」に置き換わっていく（AIによる暫定処理）	**TRL** 富山を選ぶ際にTRLの点数を参照。その時点の式と、本資料の式は一致しない（p.23）

半年を通じて消えなかった論点：ブロックには運営する主体がいない。ブロックは人・物・金・情報の流通網としてしか存在していない。

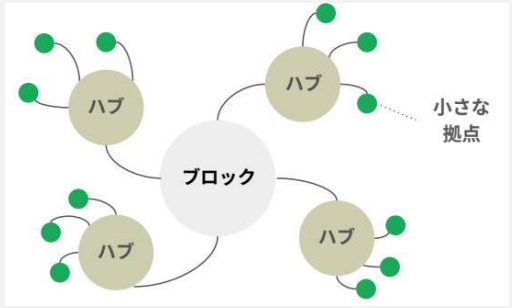
モデルA（ピラミッド型）とモデルB（ネットワーク型）

ここまでの議論 ②

ブロック・ハブ・ノードの3層は、見方によって2つの定義がありうる（2026年3月のブリーフィングで整理）。図は熊本レポートから転載しており、レポートでは「階層構造モデル」「圏域モデル」と呼んでいる。

モデルA　ピラミッド型

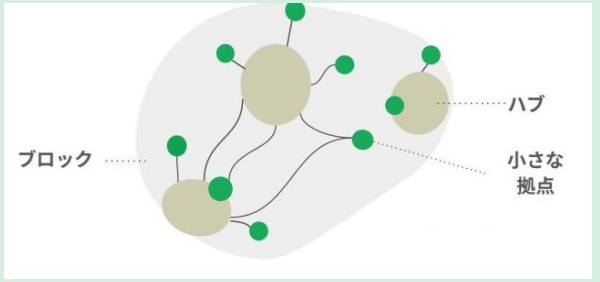
不採用



考え方	3層を機能の集積規模で定義する。空港・大学・金融・医療・行政が集積する都市をブロック拠点とし、上位が下位をけん引する垂直的な関係
問いの焦点	どこに何が集積しているか
仙台の位置	東北の機能集積として、ブロック拠点

モデルB　ネットワーク型

採用



考え方	3層を接続の質と方向で定義する。ハブや小さな拠点の機能が絡み合って浮かび上がる圏域をブロックとし、自律的な循環が成立しているかを基準にする
問いの焦点	どの方向に、誰のために循環しているか
仙台の位置	東北のノード群の資源を東京に転送する「転送レイヤー」

出発点の認識：モデルBで見ると、自律したブロックと呼べるのは東京・大阪・福岡の3圏域のみ。それ以外の地方圏はほぼすべて、東京への転送レイヤーとして構造化されている。4月にはこの認識を前提に、ノードとハブの接続の濃さで全国を55に括り、それぞれがどこまで自律しているかをTRLで測る形にした。

高山はどこに属するのか —— ヒアリングで線を引き直した過程

線の引き直し：飛騨高山　★ 要点

55ブロックは、机上で一度引いて終わりではない。違和感を拾い、現地を知る人に聞き、引き直す。飛騨高山はその最初の例である。

1 **2026.04**

初版では「岐阜ブロック」に入っていた

県単位の発想が残っており、高山市は岐阜市・大垣市・各務原市と同じブロックに置かれていた。

2 **2026.05**

「美濃と飛騨は同じ生活圏ではない」

次の行き先を探す議論で違和感が出る。岐阜市までは電車で2.5時間かかる一方、富山市は90分圏に入る。

3 **2026.05**

現地を知る人に聞く

古里氏へのヒアリングで、魚・食料・人の行き来は富山とのほうが濃く、岐阜とは行政上の所属だけで実態が薄い、という実感を得た。

4 **2026.05**

富山寄りに置き直す

高山を岐阜ブロックから外し、富山大ブロックの中の小ブロック（飛騨）として置き直した。医療・教育・食料は富山が補い、水・エネルギー・金融は飛騨で自立していると見た。

5 **2026.07〜**

決めきれない点を持って、富山へ

未確定 → 論点 3

人口は約15万で、30万という目安に届かない。これをブロックとみなせるかは決めきれず、確かめる問いとして行き先を富山（FW3）に変えた。

初版

岐阜ブロック

岐阜市・大垣市・各務原市・高山市 ほか（美濃と飛騨が同じ括り）

↓

見直し後の仮説

富山大ブロック

富山市・高岡市・氷見市・南砺市 ほか

└ **飛騨小ブロック**

高山市（ハブ）・飛騨市・白川村・下呂市

ここに出ている手順：統計で線を引く → 違和感を拾う → 現地を知る人に聞く → 引き直す → 決めきれない点は現地で確かめる

SECTION 1 ｜ B ブロック

ブロックとは何か
どのように範囲を決めるのか

ひとことで言うと

人・物・金のつながりの網と濃さで括り、重要なインフラが揃い車で90分以内に行ける範囲で区切ったもの。全国を55に分けた。

測る前に、何を1つの地域として括るかを決める。行政区分ではなく、人・物・金・情報がどう流れているかという実態で括る。

ブロック ＝ 重要なインフラが十分に揃い、車で90分以内で行ける範囲

ブロックとは何か ★ 要点

判定は二段階で行う。まず人・物・金のつながりの網と濃さで括り（第1段階）、次に重要なインフラが揃う範囲・移動時間・人口規模・地理条件で、どこを区切りにするかを決める（第2段階）。

定義の軸

第1段階で浮かび上がったハブから車で90分以内で行ける範囲に、重要なインフラ——大学、大きな病院、新幹線など——が十分に揃っていること。1つの市だけで見ると大きな病院がない、大学が足りないといったことが起きる。それが起きない広さを1つのブロックとして括る。

判定に使うインフラ8要素

医療	教育	水	エネルギー
食料	交通	通信	金融

90分・8要素はいずれも、全国を括るために仮に置いたアイデアである。

未確定 → 論点 2

行政区分や通勤圏だけでは捕まえられない2つ

1. **単一フロー**
   通勤だけで境界を引くと、生活・文化・インフラを補い合う接続が映らない

2. **単一階層**
   「室蘭の大ブロック≒札幌」のような圏域どうしの従属・補完関係を表せない（要確認）

地域生活圏などとの違い

未確定 → 論点 5

使うデータは同じでも、使う順番と方法が違うという見立て。結果を比べるまで答えは出ない（想定Q&A p.36）。

今後の検討課題：ブロックの境界線を確定させるかどうか

未確定 → 論点 1

この定義では、ブロック同士が重なっていてもよいものとしている。実態の圏域は重なるのが自然だからである。一方で、TRLを定量で測るには重ならない境界線が必要になる。重なりを許容したまま扱うのか、相互排他的な線を引くのかは、今後の検討課題とする。

成立要件は5つ。1・2で網と濃さを決め、3〜5で区切りを決める

ブロックの成立要件 詳細

「必須」と「補助線」に分けていたが、正確には二段階の判定である（括弧内は元資料での要件番号）。最初に置いたブロックの定義とも違いがあり、ここは検討が必要である。

要件	内容	位置づけ	判定基準
要件1　経済的双方向性 **（元 要件2）**	物流・人流・金融が域内で双方向に循環している	第1段階 網と濃さを決める	域内取引比率／通勤通学率／地域金融機関の融資圏
要件2　Hub-Node構造 **（元 要件5）**	ハブと末端ノードの階層が識別でき、入れ子構造を許容する	第1段階 骨格（ハブとノード）を決める	中心市の人口集中度／行政・商業・医療機能の集積度
要件3　移動時間 **（元 要件1）**	第1段階で浮かび上がったハブから、車で90分圏で閉合する	第2段階（範囲） どこで区切るかを決める	ハブからの実所要時間
要件4　人口規模 **（元 要件3）**	中規模都市30万人を基準とする規模の目安	第2段階（規模） どこで区切るかを決める	圏域総人口
要件5　地理条件 **（元 要件4）**	流域・地形・気候など自然条件の一貫性	第2段階（地理） どこで区切るかを決める	6地政類型（内陸山地／海沿い港湾／都市部市場／平野農業／複合／特殊）

前ページの8要素との関係

8要素は、ブロックの中に何が揃っているべきかを見る。第1段階（要件1・2）でつながりの網と濃さを捉え、第2段階では、8要素に届く範囲（要件3）と8要素を維持できる規模（要件4）を目安に区切る。

90分・30万人は仮置き

未確定 → 論点 2・3

90分は、飛騨と富山を同じ圏域と見ていた当時の想定から置いた値で、1時間程度とする考え方もある。30万は8要素が揃う圏域に必要な規模として仮に置いた数字で、20万でも成立する条件があるかは要議論。

事例：富山大ブロックの入れ子構造

大小二層で捉える

大ブロックは中心ハブ都市を核に90分圏で双方向循環する広域圏。小ブロックはその内部で独自の地域ハブを持ち、準独立的に機能する圏域である。高山を見直した結果（p.9）を、この入れ子で表す。

大ブロック
富山

中心ハブ＝富山市（40万）
複合経済圏（平野＋山地＋港湾）

└ 小ブロック
飛騨高山

地域ハブ＝高山市。富山大ブロックのNodeであり、かつ飛騨小ブロックの中心ハブ（二重性）

└ Node
飛騨市・白川村・下呂市

飛騨小ブロック内の末端集落

└ Node
高岡市・氷見市・南砺市・小矢部市

富山大ブロック内の他のNode

飛騨高山が示していること

・岐阜市まで電車2.5時間、富山市は90分圏内
・経済的双方向性でも移動時間でも、富山大ブロックに属すると見ていた
・人口約15万。30万を満たさない地域をブロックとみなせるかは、確かめに行く仮説だった
・森林率92%の内陸山地型
・木材（素材）→ 家具・地酒（加工）→ 観光（流通）と、域内に産業の層はある

未確定 → 論点 3

インフラの階層補完：小ブロックで不足する要素を大ブロックが補完していれば、階層全体として「成立」とみなす（飛騨は水・エネルギー・金融は自立、食料・医療・教育は富山が補完）。

東京は同列に置かず「重力場」として扱う

三層接続モデル

地域から都市への価値の流れを、小ブロック → 大ブロック → 東京圏の三層で捉える。東京は地方ブロックと同列ではなく、全国規模で価値を吸引する別カテゴリとする。

東京圏（重力場）

別カテゴリ

全国規模で価値を吸引する装置・本社集積・首都機能

大ブロック

例：富山

中心ハブ都市を核に90分圏で双方向循環する広域圏

小ブロック

例：飛騨高山

地域ハブを持ち準独立的に機能する圏域

※ まだ検証しきれていないが、仮説として記載しておく。三層それぞれで何を見るのかは次ページで詳述する。

なぜ東京を別カテゴリにするか

地方ブロックと同じ基準で並べると規模が3桁違い、比較が成立しない。東京圏の地域経済循環率は156.4%で、域外から所得を吸い込む強流出型として現れる。

大阪・福岡はどう扱うか

モデルBの出発点では、自律したブロックを東京・大阪・福岡の3つとした（p.8）。このうち東京だけを重力場として別枠に置いている。大阪・福岡を東京と並ぶ三大都市圏とするのか、東京ワントップで整理するのかは決まっていない。

未確定 → 論点 4

3つの接続と、その向きを見る

三層で何を見るか　詳細

見るのは「つながっているか」ではなく「双方向か、一方通行か」である。同じ接続でも、戻りがあるかどうかで地域に残るものが変わる。この判定が、のちの接続パターン（p.29）の入力になる。

① 小 ⇄ 大

何が流れるか

物流・人流・金融・行政・文化

双方向なら

小ブロックの産品が大ブロックの結節機能を通って外へ出て、需要と所得が小へ戻る

一方通行なら

小が大に吸い上げられるだけになる（大が小に再分配しない）

判定に使う材料

域内取引比率／通勤通学流動／地域金融機関の融資圏

② 大 ⇄ 東京

未確定 → 論点 4

何が流れるか

本社機能・投資・人材・観光

双方向なら

東京から投資・関係人口・需要が戻り、大ブロックに本社機能が残る

一方通行なら

稼ぎも本社も東京へ抜け、支店経済化する（残す力＝Rが下がる）

判定に使う材料

地域経済循環率／雇用者所得流出入／本社所在地

③ 小 → 東京（バイパス）

何が流れるか

観光・ふるさと納税・EC など、中間を飛ばす直接接続

双方向なら

—（この接続自体は一方通行として現れることが多い）

一方通行なら

小が大を経由せず東京・海外と直結し、大ブロックの結節機能が空洞化する

判定に使う材料

インバウンド動線／ふるさと納税・EC の出荷先／広域観光統計

要点：3つの接続は独立に判定する。①が双方向でも②が一方通行なら支店経済、①が切れて③だけが太ければバイパス型になる。組み合わせが循環パターンを決める。

所属（生活）と結節（経済）は一致しない

接続の二軸

軸1（生活インフラ接続）は「どの大ブロックに所属するか」を決め、軸2（経済結節接続）は「循環の質」を決める。飛騨は入口が富山、出口が東京・海外で、二軸が別の接続先を指す。

	生活インフラ：充足	生活インフラ：不足
経済結節 段階的（小→大→東京）	**健全型** **富山・金沢** 生活も経済も域内で回り、戻りがある	**外部依存型** **該当例は要フィールド同定** 結節はできるが生活基盤を域外に依存する
経済結節 バイパス・断絶	**出口偏り型** **飛騨高山** 生活は健全。出口だけが大ブロックを飛ぶ	**脆弱型** **室蘭（位置づけは要確認）** 両軸とも弱い。最も脆弱な状態

二軸を分ける実益

軸1の健全さ＝レジリエンス（持続性）
軸2の健全さ＝循環の質

介入への含意

飛騨：生活インフラ接続は健全なので触らない。経済結節を富山に取り戻す設計に絞る。

室蘭：両軸とも弱い。生活基盤の充足と経済結節の構築を同時に設計する必要がある。

※『ブロック定義とロジック整理7』（2026.05）第6章の整理に基づく。4象限への当てはめ（とくに外部依存型と脆弱型）は確認中。4象限は接続パターン（p.29）を二軸に展開したもので、健全型＝①、出口偏り型＝⑤、脆弱型＝④に対応する。

SECTION 2 | C TRL

TRL とは何か
実際の数値はどのように出るのか

ひとことで言うと

稼ぐ・残す・繋ぐという市場の回路と、市場のそばにある自然資本、市場の外にある支え合いを5変数の積で測り、どこが詰まっているかを名指しする指標。

Territory Resilience Level。点数の高低ではなく、詰まっている変数を見るために使う。

TRL ＝ V × R × D × C × S。足し算ではなく掛け算にする

TRLとは何か　★ 要点

各変数を1〜5で評価して積を取る。1つでも極端に低い変数があれば全体が大きく沈む「ボトルネック検出型」の指標である。

$$TRL = \underbrace{V\ 稼ぐ力 \times R\ 残す力 \times D\ 繋ぐ力}_{市場の回路} \times \underbrace{C\ 自然資本力}_{市場のそば} \times \underbrace{S\ 支え合う力}_{市場の外}$$

なぜ積にするのか

足し算だと、弱点が平均に埋もれる。掛け算なら、1つでも極端に低い変数があると全体が大きく下がり、詰まっている箇所が自動的に露出する。

どれか1つが欠けると、循環は成立しない。稼いでも残らなければ流出する。残っても繋がらなければ、単一産業に依存する。回路が回っていても、元手の自然資本や支え合いが痩せれば長くは続かない。

2段階で使う

未確定 → 論点 6〜9

Step 1

公開統計から仮スコアを置く

市区町村〜都道府県単位で取得できる。ただし接続の強さや支え合いの実態は統計では測れない。あくまで仮設定。

Step 2

フィールドで確かめて直す

統計に出ない産業間取引の実態や、支え合いの実態を、観察とインタビューで直接確かめて点数を修正する。

市場の回路だけでなく、そのそばにある元手と支え合いも見る

なぜこの5つで見るのか

人口の増減やGDPではなく、「持続的に良い」状態を測りたい。そのために、市場の回路（V・R・D）に、市場のそばにある自然資本（C）と、市場を通らない支え合い（S）を加えた。

市場の中 — **市場の外**

V	R	D	C	S
稼ぐ	**残す**	**繋ぐ**	**自然資本**	**支え合う**
外から価値を得ているか	稼いだ分が域内に残るか	域内で異なる産業が連鎖するか	水・農地・森林・エネルギーが、地域の元手として使える状態にあるか。値がつく部分もつかない部分もある	労働交換・共同作業・お裾分けなど、市場を通らない支え合いが残っているか
		市場の回路	**市場のそば**	**市場の外**

市場の回路と、そのそばと外

V・R・D は市場の回路を測る。ただし回路だけでは地域は測れない。

回路の元手になる自然資本（C）は市場のそばにあり、値がつく部分もつかない部分もある。市場を通らない支え合い（S）は市場の外にある。

この2つも同じ式に入れる。

ブリーフィング（2026年3月）で挙げた「人口減少時代に見るべき4つの指標」との対応

①地域経済循環率 → R	②循環の質（誰が循環を作るか）→ V・D	③人口の質的動態 → S	④自然資本の維持状態 → C

※ 5変数を選んだ理由は、これまで明文化されていなかった。上記は初期の測定プロトコルとブリーフィングから再構成した案であり、チームでの確認が必要。

5つの変数は、それぞれ別の失敗の仕方を検出する

それぞれの指標について 詳細

C | TRL

初期の測定プロトコルで置いた定義と指標。稼げているかだけでなく、残るか、繋がっているか、元手の自然資本が使える状態にあるか、支え合いが残っているかを分けて見る。

	名称	統計での仮設定に使う指標	何を見ているか	未確定
V	**稼ぐ力（フロー総量）**	RESAS 第2次・第3次産業の一人当たり付加価値の全国順位（補完：農業産出額、再エネ発電容量）	地域が生産・販売で生み出す付加価値。規模ではなく一人当たりで見て、人口差を補正する	
R	**残す力（域内還流率）**	RESAS 地域経済循環率	稼いだ収益が域内に残るか。統計で直接測れる唯一の変数	
D	**繋ぐ力（異業種接続密度）**	6次産業化の販売金額、産業多様性（HHI逆数）、観光×農業、再エネ×農業	異なる産業が域内で実際に接続されているか。統計では「存在」しか測れない	未確定 → 論点 8
C	**自然資本力**	候補は農地生産性・エネルギー自給率・温泉地熱の活用・林業の付加価値の4つ。ただしスコアは農地とエネルギー自給率の2つで付けている	水・農地・森林・地熱・風力などの自然資本が、地域の元手として使える状態にあるか	未確定 → 論点 6
S	**支え合う力**	何で取るかが決まっていない（候補は次ページ）	市場を通じない贈与・互助・共同作業の強さ	未確定 → 論点 7

Cは初期プロトコルでは「自然資本変換係数」と呼んでいたが、本資料では「自然資本力」と捉え直している。V・R・Dは RESAS で一応の値が取れる。C・S は、見たいものと取れる数字の間に開きがある（次ページ）。

C と S は、何で取るかがまだ決まっていない

論点：C と S をどう取るか ★ 要点

C | TRL

ここは結論ではなく論点として置く。見たいものははっきりしているが、それを表す数字が見つかっていない。

C　自然資本力

未確定 → 論点 6

見たいもの

水・農地・森林・エネルギーなどが、地域の元手として使える状態にあるか。

いまの取り方の問題

スコアは農地生産性とエネルギー自給率の2つだけで付けている。どちらも自然資本が「あるか（量）」ではなく「使えているか（活用）」を測る数字で、途中から「転換力」に近いものになっていた。水・森林・地熱なども入っておらず、自然資本力の代理指標になりきっていない。

実際に起きていること

富山のC＝2は「自然が少ない」のではなく、活用の指標で低く出た可能性がある。根拠もRESASの「その他支出」の流出（－24.5%）で、プロトコル自身がCに使わないと定めた指標である。AIで出した数字なので、正しいかも確かめられていない。

決めること

・何を自然資本に含めるか（量を見るか、活用を見るか）

S　支え合う力

未確定 → 論点 7

見たいもの

市場を通じない贈与・互助・共同作業がどれだけ残っているか。

なぜ難しいか

支え合いは統計に出にくい。市町村単位で揃う統計も限られる。

初期プロトコルで挙げた候補

集落営農組合数の変化率／若年女性の転出超過率／ボランティア行動者率／信金・信組の預金シェア／地域幸福度（LWC）

決めること

・統計の代理指標で取るのか、現地での観察で取るのか
・どの単位（市町村・ブロック）で取るのか

変数ごとに、統計の値を1〜5に置き換える（初期プロトコル）

1〜5へのスコア変換基準　詳細

C | TRL

Rだけは両側に閾値を持ち、循環率が高すぎる場合も流出型として低評価する。D・Cは統計での仮設定であり、フィールドで直す前提で置いている。Sは基準を置いていない。

V　稼ぐ力	R　残す力	D　繋ぐ力	C　自然資本力	S　支え合う力
2・3次産業の一人当たり付加価値 全国順位の平均	地域経済循環率	6次産業化 × 産業多様性	農地生産性 × エネルギー自給率	何で取るかが決まっていないため、変換基準は置いていない。
5　全国1〜200位	5　98〜105% （自立循環）	5　6次化が高水準 ＋多様性が高い	5　ともに高い	
4　201〜400位	4　95〜98%	4　どちらか一方が 高水準	4　どちらか一方が 高水準	
3　401〜700位	3　90〜95%	3　どちらも中程度	3　どちらも中程度	
2　701〜1000位	2　80〜90% ／105〜115%	2　6次化が低く 産業が集中	2　農地生産性が低い か域外に流出	
1　1001位以下	1　80%未満 ／115%超	1　ほぼ単一産業	1　自然資本が乏しいか 域外企業が収益化	
			未確定 → 論点 6	未確定 → 論点 7

※ その後の55ブロック一覧では、Vを金額帯、Cを農地生産性のみに置き換えていた。本資料は初期プロトコルの基準を載せている。

計算例：富山ブロック —— 定義と置き方で点数は動く

実際の数値はどのように出るのか

同じ富山でも、どの定義で、どう置いたかによって点数が変わってきた。富山を選んだ時点の点数と、本資料の点数は一致しない。

初期プロトコルでの置き方

V	R	D	C	S
第3次産業 全国513位	地域経済循環率 98.9%	統計では 判断できず要確認	その他支出の 流出 −24.5%	統計では 判断できず要確認
＝3	＝5	＝3〜4	＝2	＝3〜4

初期プロトコル

$$TRL = 270 \sim 480$$

D・S の幅をそのまま掛けた素点の積

55ブロック一覧（統計仮設定版）

$$TRL = 3 \times 5 \times 4 \times 2 \times 3 = 360$$

Vを金額帯、Dを産業多様性、Cを農地生産性で置き直した

読み方：どちらの置き方でも、富山の詰まりはCに出る。ただしCの根拠そのものが揺れている（p.21）。Sは根拠になる指標がないまま値が置かれている。点数そのものより、どの変数がまだ決まっていないかを見る。

※ 360は55ブロック一覧の値。プロトコル本文の表は富山のTRL仮を「90〜」としており各変数の積と合わない。当時の値は確認中。

TRLは答えではなく、問いの入口である

それらをどのように使うのか ★ 要点

スコアの高低で地域を格付けするための道具ではない。どこが詰まっているかを名指しし、次に見るべき場所を決めるために使う。

TRLを測る → ボトルネックの形が出る → 形がパターンを指す → パターンが打ち手を決める

TRL：備えの高さ

5変数のバランスから、ショックに対する備え（レジリエンス）の水準を測る。値そのものより、どの変数が沈んでいるかを見る。

循環パターン：循環の質

価値が域内を回っているか、一方通行で抜けているか。三層の接続（p.15）の向きから判定する類型で、TRLのどの変数が詰まっているかの因果の物語を指す（p.28・29）。

使い方の原則：必ず TRL × パターン の二軸で読む。そのうえで、数字の高さとその質のズレをフィールドで確かめる。大分市の地域経済循環率は121%と高く見えるが、重化学工業の大企業が稼いでいるだけで、企業が撤退すれば一気に崩れる構造である。ツールは、何が見えていないかを教えるためにある。

SECTION 3 | D 地域の型

地域の型
持続可能にするための4つの型

ひとことで言うと

TRLの結果を、現在地 → 詰まりの形 → 循環の質 → 打ち手 の順に読み替えて、関わり方の仮説にする。

現在地の型（診断タイプ）→ 構造の型（シグネチャ）→ 接続の型（循環パターン）→ 打ち手の型（2軸4象限）

診断タイプ —— TRLの水準で地域の現在地を示す

地域の型 ① 現在地の型

TRLの水準で55ブロックを5つの帯に分け、それぞれに呼び名と読み方を与えたもの。格付けではなく「次に何を問うべきか」を切り替えるスイッチである。分布は次ページ。

◎	**循環強化型**	TRL 300以上	10 ブロック	5変数すべてが中位以上で相互補完的。投資が最も効果的に作用する。維持と横展開が論点になる。
○	**循環機能型**	TRL 200〜299	21 ブロック	基本的な経済循環は機能している。1〜2変数の改善で◎へ移行可能。介入の費用対効果が最も高い層。
△	**転換萌芽型**	TRL 100〜199	17 ブロック	構造的問題はあるが、特定の変数が低く全体を引き下げている。ボトルネックが明確な層。
▼	**ザル／流出型**	TRL 100未満	6 ブロック	複数の変数が低位。構造改革なしには自律的な再生は困難。オホーツク・青森・北九州工業など。
▼	**流出型（強）**	R＝1 かつ V≧4	1 ブロック	高い付加価値を生むが地域内に残らず外部へ流出。東京圏。地方と同じ物差しでは読めない。

注意：診断タイプは「現在地」しか示さない。同じ○でも、詰まっている変数が違えば打ち手はまったく違う。だから次の「構造の型」が要る。

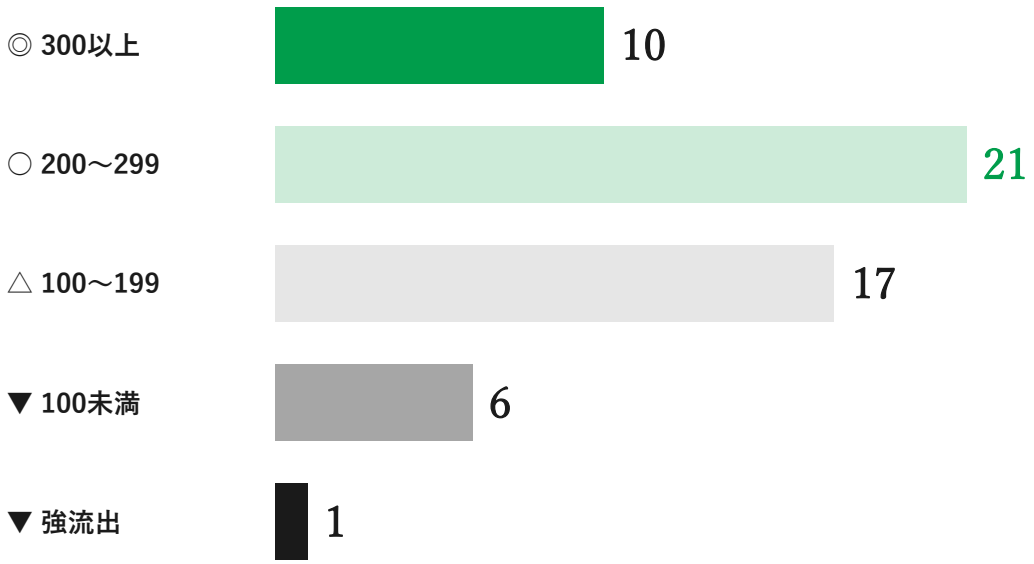
補足：呼び名の置き方

当時は、TRL 200以上を「基本的な循環が機能している」、300以上を「さらに強く回っている」として呼び名を置いた。呼び名は点数の帯につけたもので、その地域の循環が実際に機能しているかは点数だけでは判断できない。接続パターンの「①完全循環」（p.29）とは別の分類である（例：富山はTRL 360で循環強化型、接続パターンでは完全循環の例）。

55ブロックの診断タイプ別の分布

55ブロックに仮スコアを置いた結果

55ブロック一覧（統計仮設定版）を、前ページの5つの帯で数えたもの。RESASで実測できたのは15ブロックで、残る40は地域特性からの推定である。



右端の1ブロック＝東京圏。循環率156.4%の強流出型で、地方と同じ物差しでは読めないため別枠で扱う。

最多は循環機能型（21）だが、点数の帯の分布であり、その地域の循環がうまくいっているかは点数からは判断できない。

上位

432	琵琶湖（滋賀）／愛媛／徳島・香川	すべて推定
360	富山／大分・別府	実測
	奄美	推定
324	長野／岐阜／京都／岡山	すべて推定

下位

40	東京圏	実測・強流出型
45	オホーツク	実測・循環率74%
72	青森／北九州工業／沖縄本島	すべて推定

未確定 → 論点 9・10

※ 各ブロックの点数は、Vを金額帯・Cを農地生産性で置いた版のもの。初期プロトコルの基準で置き直すと変わる。

循環パターン ＝ TRLのボトルネック・シグネチャ

地域の型 ② 構造の型

三層の接続（p.15）の向きから読み取る「循環の壊れ方」の類型である。独立した分類ではなく、TRLのどの変数がボトルネックかを指し、その因果の物語を与える。

循環パターン	ボトルネック	因果の物語	該当例
基幹産業喪失	V	産業構成の核が崩れる。稼ぐ主体そのものが失われる	室蘭・呉・玉野・高岡（過去）
支店経済	R	稼ぐが本社（東京）へ流出し、保持率が低い	日立　※V崩壊と同型でR構造のみ違う変種と再評価
供給特化	R	供給はするが付加価値を取れない。下請的な位置に固定される	—（フィールドでの同定が必要）
重力バイパス	D	より大きな核に素通りされる。結節が働かない	飛騨高山・ニセコ・都城（接続パターン⑤に対応）
核なし	D	循環を束ねるハブが不在。まとまりが生まれない	—（フィールドでの同定が必要）
人材流出	S	支え合いの担い手が抜け、回路を支える力が痩せる	—（Sの取り方とあわせて要検討）

未確定 → 論点 7

一本の鎖：TRLを測る → ボトルネックの形が出る → 形がパターンを指す → パターンが打ち手を決める。TRLは計測、パターンは読み方である。

循環の質を5パターンに分け、介入の方向を変える

地域の型 ③ 接続の型

三層（小→大→東京）の各接続が双方向か一方通行かで判定する（p.15の3つの接続がここに入力される）。分析・介入設計ではこの5パターンを正式単位とする。

パターン	構造	該当例	介入の方向
①完全循環	小⇄大⇄東京の全層が双方向。流入＝流出が均衡している	金沢・富山・京都・浜松	**理想形。維持する**
②上流断絶	小⇄大は双方向だが、大→東京が一方通行。大が東京に吸われる	仙台・北九州・熊本菊陽	**大ブロックの本社機能を地元に留める**
③下流断絶	大⇄東京は双方向だが、小→大が一方通行。大が小を吸い上げる	庄内南部・八戸圏域	**大ブロックが小ブロックに再分配する**
④完全流出	小→大→東京の一方通行のみ。地域空洞化の典型（最頻）	室蘭・湖西・飯田・両毛	**循環ループそのものを再構築する**
⑤バイパス	小が大を通らず直接東京と接続。大ブロックが空洞化する	飛騨高山・ニセコ・都城	**大ブロックの結節機能を回復する**

外部説明時は3類型に畳む

完全循環型（①）／部分断絶型（②＋③）／流出・バイパス型（④＋⑤）。導入や概要説明ではこの3つで足りる。

ただし介入設計では必ず5パターンに戻す

②上流断絶と③下流断絶は処方箋が正反対（前者は大の本社を留める、後者は大から小へ再分配）。畳んだまま打ち手を議論すると混乱する。

アセットの主体 × 状態 の2軸4象限で介入を分岐させる

地域の型 ④ 打ち手の型

「結局ドミナント企業の有無に潰れるのでは」という指摘への回答。企業が持つのかコモンズなのか、健在なのか衰退・消失したのかで、打ち手はまったく別物になる。

	アセット健在	アセット衰退・消失
企業保有	**共存・補完型** 主産業の周辺で多様化する。企業の地域コミットに濃淡がある（YKK型〜不在型）	**アセット転換型** ← 室蘭 企業の遺産をコモンズ化して再利用する。打ち手は右の3分解へ
コモンズ	**熊本型（コモンズ運営）** ← 熊本 コモンズの保全ガバナンス＋それを使う産業の誘致	**最難関** 潜在コモンズの発見から始める。時間のかかる再育成であり、長期戦になる

「企業 × 衰退」象限の打ち手
企業アセットの3分解

1. **企業所有（土地・工場・設備）**
   協業・買取・オーナー交代のいずれかが必須。待てば更地化で消える（呉）
2. **公共・準公共インフラ（港湾・用水・電力網）**
   所有は自治体・公益事業者。企業の許可なく再目的化できる（室蘭＝洋上風力O&M拠点化）
3. **分散保有（協力会社の技能・大学・文化・人材）**
   誰の所有物でもなく地域に残る。新需要への転用が勝負（室工大・協力会社群）

「企業がなくなればどこもコモンズ運営になるしかない」ではない。室蘭の問いは「縮小が残すもののうち、コモンズに転換できるのは何か」。

使えている状態とは、地域の状態が一文で言えること

使えている状態とは ★ 要点

ツールの成否は精緻さではなく、地域の現在地と打ち手が一文に収まるかで判定する。

例：室蘭（説明のための例で、地域は問わない）

「室蘭 ＝ V型ボトルネック × 企業アセット衰退中。ただし天然良港・室蘭工業大学・港湾インフラは健在 → 残っているアセットを起点に稼ぐ力を再生する転換戦略。NKREの関与域＝その転換に必要な空間の供給」

想定する3つの使いどころ

1 PGCL内部：仮説の設計

次に行くフィールドを選ぶ。数値と現地実感の乖離が大きいブロックを優先し、確認すべき問いを事前に絞る。

2 NKRE：事業機会の判断

どのアセットが健在かを見て、空間供給事業者として関与できる転換点を特定する。

3 地域・行政との対話

外部説明時は5パターンを3類型に畳んで使う。介入の議論に入ったら5パターンに展開し直す。

未確定の14論点を、ここに集約する

いま決まっていないこと　★ 要点

各ページでは「未確定 → 論点n」の印だけを付けている。何が決まれば仮説が道具になるかを、決め方とあわせて示す。

	#	論点	何が決まっていないか	詳細	決め方
ブロック	1	**境界線を確定させるか**	重なりを許すか、重ならない線を引くか	p.11	チームで議論
	2	**定義と区切りの根拠**	90分・30万・8要素は仮置き。90分は1時間程度とする考え方もある	p.12	データ・資料
	3	**区切りの目安を満たさない地域**	人口約15万の飛騨高山をブロックとみなすか	p.9	**フィールド**
	4	**東京との接続と三層構造**	接続の測り方。大阪・福岡を東京と並べるか	p.14	チームで議論
	5	**地域生活圏などとの違い**	使う順番と方法が違うという見立て。結果を比べるまで答えは出ない	p.36	結果の比較
TRL	6	**C（自然資本力）を何で取るか**	農地とエネルギー自給率だけでは代理指標になっていない	p.21	データ・資料
	7	**S（支え合う力）を何で取るか**	統計で取るか観察で取るか、どの単位で取るか	p.21	**フィールド**
	8	**D（繋ぐ力）の接続の強さ**	統計は産業の「存在」しか示さない	p.20	**フィールド**
	9	**定義と置き方のずれ**	初期プロトコルと一覧で V・C・S の置き方が違う	p.22	置き直し
	10	**推定値と圏域の境界**	55中40が推定。RESASは自治体単位でブロックとズレる	p.27	データ・資料
型・枠組み	11	**接続パターンの持ち方**	総合で1つにするか、軸ごとに持つか	p.33	チームで議論
	12	**越境型ブロックの偏り**	県をまたぐブロックが③④に偏る	p.33	**フィールド**
	13	**文化・物語と包摂の次元**	TRLにこの2つの軸がない	p.33	チームで議論
	14	**介入のゴール設定**	④を①にするのか、④のまま質を高めるのか	p.33	チームで議論

色付きのC・Sが決まるまで、TRLの値は「V・R・Dの積に、仮のC・Sを掛けたもの」として読む。

枠組みそのものに残っている論点

論点 11〜14 の詳細　詳細

データの精度以前に、型の枠組みに未決の論点が残っている。これらは机上では決着せず、フィールドでの具体例を待つ必要がある。

11 接続パターンを総合で持つか、軸別で持つか

例：庄内南部は物流では③下流断絶だが、文化では仙台と双方向。1つのラベルに畳めない地域がある。

12 越境型ブロックが構造的に③④に偏る

飛騨→富山、湖西→京都など。県の予算配分が、実態経済の双方向化を妨げている可能性がある。

13 文化・物語と、社会的多様性（包摂）の次元がTRLに軸を持たない

初期仮説にあった「物語る都市（Story）」の系統が痩せており、飛騨の観光を経済の結節としてしか捉えられていない。初期仮説の「多様な価値観の包摂」も、支え合いの指標の中に薄く残るのみ。

14 介入のゴール設定

④完全流出を①完全循環にするのか、それとも「高自給型④」に質を高めるのか。ポストグロースの視点では後者も有力である。

仮説を道具にするために残っている5つの課題

今後の課題　★ 要点

論点一覧のうち、道具として使えるかどうかを左右するものを5つの課題にまとめた。中心になるのは1つ目、ブロックの境界が現地の実感と合うかである。

1	ブロックの境界は、現地の実感と合うか	つながりの網と濃さで括り、インフラが揃う範囲で区切った線は、現地の人が「自分たちの範囲」と感じる線と一致するか。ズレるとしたらどの面（生活・物流・文化）でズレるか。	論点 1・3
2	TRLのボトルネックは、現地でも同じ形か	数値が指したボトルネック（V・R・D・C・S）が、現地の当事者の課題認識と一致するか。一致しない場合、統計に埋もれている構造は何か。	論点 8
3	C と S を、結局のところ何で取るのか	自然資本の使われ方と支え合いの残り方を、観察できる事象としてどう定義し直すか。	論点 6・7
4	数字の高さと質のズレをどう拾うか	大分市は循環率が高く見えたが、重化学工業の大企業が稼いでいるだけで、撤退すれば崩れる構造だった。同じズレを検出する手順を作れるか。	論点 10
5	打ち手の型は、現地の主体に接続するか	2軸4象限で示した打ち手を、実際に担いうる主体（企業・自治体・大学・事業者）が存在するか。存在しない場合、それは型の問題か地域の問題か。	論点 14

判定基準：「説明してわかってもらえる」より「実際に使って意味がある」。

まとめ

地域のどこに手を入れるかの仮説を、毎回同じ手順で立てるための3つの道具

01 ブロック＝範囲を決める道具

人・物・金のつながりの網と濃さで括り、重要なインフラが揃い車で90分以内に行ける範囲で区切る。全国を55に分け、現地で聞きながら引き直していく（高山の例）。

02 TRL＝現在地を測る道具

市場の回路（稼ぐ・残す・繋ぐ）と、市場のそばにある自然資本、市場の外にある支え合いを、5変数の積で測る。ボトルネックを露出させるための指標であり、単独では読まない。

03 地域の型＝打ち手に翻訳する道具

診断タイプ（現在地）→ シグネチャ（構造）→ 接続パターン（質）→ 2軸4象限（打ち手）。1本の鎖としてつなぎ、一文の診断にする。

いま決まっていないこと（14論点）は p.32。とくに C と S の取り方が決まるまで、TRLの値は仮のままである。

地域生活圏やコンパクトシティと、何が違うのか

想定Q&A　既存の圏域設定との比較　★ 要点

使うデータは同じでも、範囲を決める順番と使う目的が違う、というのが今の見立てである。結果として違う範囲が出るかは、まだ比べていない（論点5）。

	範囲の決め方	中心の置き方	目的
地域生活圏（2023）	実態に即して地域が主体的にデザイン。市町村界にとらわれない	定めていない	暮らしのサービスを持続させる（目指す姿）
定住自立圏	中心市が宣言し、周辺と1対1で協定を結ぶ	先に決める（人口約5万以上・昼夜間人口比率1以上）	行政の連携
コンパクトシティ（立地適正化計画）	市町村が自分の区域の中で定める	先に決める（拠点に機能を集める）	目指す街の姿に向けて誘導する
PGCLのブロック	つながりの網と濃さで括り（第1段階）、インフラ・時間・規模・地理で区切る（第2段階）	網の結果として浮かぶ	現在地と詰まりを測り、関わり方の仮説を立てる

既存の枠組みの多くは、中心を先に決めてから周りを結ぶ（モデルAの考え方）。ブロックは中心を先に置かず、つながりの網の結果としてハブが浮かぶ（モデルB）。

出典：国土交通省「地域生活圏」資料（生活圏人口10万人程度以上を一つの目安）、総務省「定住自立圏構想の概要」、国土交通省「国土計画や都市圏構想の変遷」。

既存の圏域設定との違い ①

想定Q&A　Q1〜Q3　詳細

Q1. 地域生活圏と何が違うのか

・考え方は近く、どちらも市町村界にとらわれず、生活と経済の実態で圏域を見る。
・地域生活圏は「必要なサービスが揃った姿」に向かう目標として使われる。ブロックは現在地を測る診断に使う。
・地域生活圏は範囲を地域のデザインに委ねる。ブロックはデータから範囲を引く手順を持つ。
・ただし結果として違う範囲が出るかはまだ比べていない。今の段階では方法の違いとして説明する（論点5）。

Q2. コンパクトシティと何が違うのか

・コンパクトシティは、1つの市町村の中で拠点を決め、そこに機能を集める計画である。
・ブロックは市町村をまたぐ範囲で、拠点を先に決めない。集約していく目標像ではなく、いまどこで価値が抜けているかを見る道具である。

Q3. 定住自立圏・連携中枢都市圏と何が違うのか

・これらは中心市を先に決め、周りと協定を結ぶ行政の連携の枠組みで、モデルA（中心から決める）の典型である。
・ブロックは協定や行政の意思とは関係なく、つながりの実態から引く。結果として範囲が重なる地域があっても、引き方は違う。

既存の圏域設定との違い ②

想定Q&A　Q4〜Q6　詳細

Q4. 都市雇用圏など、統計上の都市圏と何が違うのか

・都市雇用圏は、中心を決めてから通勤率で郊外を付けていく方法で、これもモデルAの考え方である。
・ブロックは通勤以外のつながり（生活・物流・金融など）も見ようとしている。ただし全国で取れるデータの中心は今も通勤・通学であり、ここは限界として伝える。

Q5. 結局、使っているデータは同じではないか

・同じである。違うのはデータを使う順番と方法だ、というのが今の見立てである。
・この違いが結果の差になるかは、いくつかの地域で既存の圏域と並べて比べるまで言い切れない。

Q6. なぜ行政区分（県・市町村）ではだめなのか

・県は途中で分けられないため、県を単位にするとブロックは県を束ねた大きな塊になり、暮らしや仕事が実際に回っている小さなまとまりが見えなくなる。
・同じ県の中の違い（岐阜県の美濃と飛騨、熊本県の県北とそれ以外）が表せず、県境をまたぐつながりも括れない。そこで市町村どうしのつながりの濃さで括り直し、55に分けた。
・高山：初期仮説の段階では、行政上は岐阜県でも、行き来は富山とのほうが濃いと見ていた。富山に行く前の見立てで、現地で確かめる問いとして持っていった。
・熊本：FW2では範囲を県全体ではなく「県北エリア」と置き、細川藩の城下町と薩摩街道という歴史的な条件で説明した。

ブロックの決め方について

想定Q&A　Q7〜Q8　詳細

Q7. 中心を置かないなら、ハブはどう決まるのか

・つながりの網の中で、結びつきが集まる場所がハブとして浮かび上がる。先に決めるのではなく、結果として見えてくるもの（p.3 の図）。
・区切りの目安になる90分は、そのハブから測る（第2段階）。

Q8. 90分・30万はどこから来たのか。国の目安と違うのでは

・どちらも仮置きの値である。90分は、飛騨と富山を同じ圏域と見ていた当時の想定から置いた。1時間程度とする考え方もある。
・国の目安は、かつての生活圏域の「1時間・30万人前後」から、今の地域生活圏の「10万人程度以上」へと変わってきている。
・ブロックでは、人口規模を区切りの基準にするより、規模はラベルとして持つほうがよいという考え方もある（論点2・3）。

ブロックの扱いについて

想定Q&A　Q9〜Q11　詳細

Q9. ブロックは誰が運営するのか	・運営する主体はいない。ブロックは人・物・金・情報の流れとして存在するもので、自治体のような単位ではない。 ・だからこそ、誰と組むかを考える前の「見方」として使う。
Q10. 線は引くのか。隣のブロックと重なってよいのか	・実態は重なるのが自然なので、重なりを許す前提で考えている。 ・一方でTRLを数字で測るには重ならない線が要るので、どちらを取るかは決めていない（論点1）。
Q11. 既存の圏域と結果が同じになったら、意味がないのでは	・範囲が同じでも、その中のどこで価値が抜けているか（TRL）と、関わり方の型まで出すところがこのツールの役割である。 ・範囲の違いそのものより、範囲を引いた後に何を見るかに主眼がある。

富山に行く前の時点で、決着していた1つと残っていた4つ

付録 ① 富山前の時点の論点　詳細

富山リサーチ前の時点の記録。残っていた4つは、いずれも p.32 の論点一覧に入っている。

決着していた

Q. どう切るのか（モデルA か モデルB か）

→ 接続の質と方向で見るモデルB（ネットワーク型）を採用。県単位では暮らしの見えない大きな圏域で括られてしまうため県を不採用とし、ノードとハブの接続の濃さで55ブロックに括り直した

残っていた論点

Q. 区切りの目安を満たさない地域をブロックとみなせるか

→ 要件を、つながりの網と濃さを決めるものと、区切りを決めるもの（90分・30万）に分ける案はあったが、人口約15万の飛騨高山をブロックとみなすかは決めていなかった。FW3で確かめに行く論点とした

未確定 → 論点 3

Q. 90分・30万という数値の根拠

→ 現状は仮値。国の目安（かつての生活圏域は1時間・30万人前後、現在の地域生活圏は10万人程度以上）との整合は未確認。人口規模でブロックを決めるのではなく、規模はラベルとして持つ、という考え方もある

未確定 → 論点 2

Q. 「東京との接続」をどう測るのか

→ 元の問いは「東京・大ブロック・小ブロックという三層構造でよいのか」。ブロックの測り方の議論が先行し、構造そのものの議論ができていない。大元の仮説は都市と地域が循環することなので、最後に答えを出したい

未確定 → 論点 4

Q. ブロックの境界線を確定させるかどうか

→ 重なってもよいという前提で定義している。一方、TRLを定量で測るには重ならない境界が必要になる。どちらを取るかは今後の検討課題

未確定 → 論点 1

ハブを特定し、その周りを経済とインフラで紐づける

付録 ② 範囲を決める手順　詳細

まず中心となるハブを特定し、次にその周りの市町村を紐づける。紐づけ方には、経済で見る方法とインフラで見る方法の2つがある。区分の3原則は、判断に迷ったときの基準として使う。

1 ハブを特定する

経済・人口集積の中心となる1〜3都市を選ぶ。

2 周りの市町村を紐づける

経済で見る：通勤通学流動・取引・地域経済循環（RESAS）
インフラで見る：8要素をどこから補っているか

3 代表市町村に絞る

計算実務上は、人口・経済規模の上位5〜7市町村を代表として採用する。

判断に迷ったときの基準｜区分の3原則

原則1　地域経済循環単位

「生産・分配・支出」が一定程度自己完結する空間を1ブロックとする

原則2　Hub-Node構造の保全

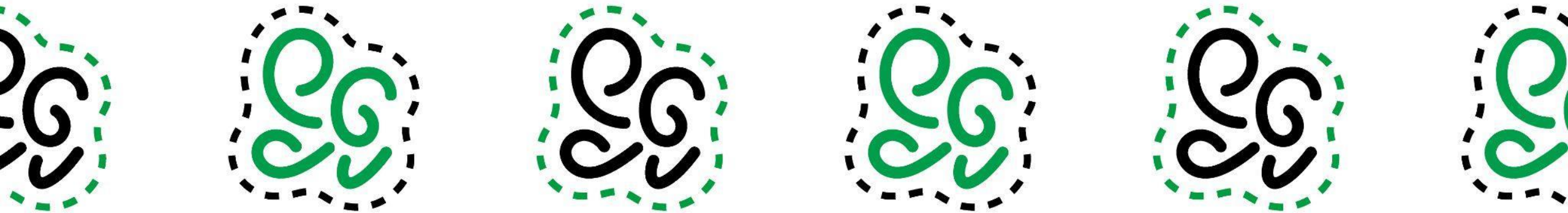
中核都市と周辺集落の紐帯を分断しない。県境をまたいでも一体性があれば統合する

原則3　機能的分節

同一県内でも産業構造・文化が異なれば分割する（例：福岡圏／北九州工業）

現在のステータス：9地域×計55ブロック。構成確定（実測計算済み）7 ／ RESAS入力済 8 ／ 構成案（draft）40。

※ この手順は『ブロック構成定義書』に記された、55ブロックのRESAS集計対象を決めるための作業手順に基づく。当時チームでこの手順を議論したかは確認中。ハブを先に決める順番になっており、本文の二段階の判定（網と濃さ → ハブが浮かぶ）とは順番が逆である。



POST GROWTH CITY LAB

FUTURE STYLE 総研F

ZEBRAS AND COMPANY

©2025 NIPPON STEEL KOWA REAL ESTATE CO., LTD. / ZEBRAS AND COMPANY Inc.